

# 令和元年度

## 新市場整備・輸出拠点化等調査特別委員会 行政視察報告書

### 1. 視察日程

令和2年1月30日（木）～1月31日（金）

### 2. 視察先

- (1) 大阪市東部中央卸売市場
- (2) 大阪木津卸売市場

### 3. 参加者

委員長 石渡 孝春

副委員長 飯島 照明

委員 小高 夕佳      葛生 孝浩      眞野 義行      大和 義己  
         星野慎太郎      会津 素子      一山 貴志      小山 昭  
         荒木 博      油田 清

## 大阪府内の卸売市場

### ■ 中央卸売市場（4市場）

種 類	名 称	開 設 者	所 在
総合市場	大阪府中央卸売市場	大阪府	茨木市
	大阪市中央卸売市場（本場）	大阪市	大阪市
	<u>大阪市中央卸売市場（東部市場）</u>	大阪市	大阪市
食肉市場	大阪市中央卸売市場（南港市場）	大阪市	大阪市

### ■ 地方卸売市場（18市場）

種 類	名 称	開 設 者	所 在
総合市場	<u>大阪木津地方卸売市場</u>	大阪木津市場株式会社	大阪市
青果市場	丸池地方卸売市場	丸池物産株式会社	池田市
	丸北地方卸売市場	株式会社丸北	池田市
	地方卸売市場大阪促成青果	大阪促成青果株式会社	大阪市
	城東青果地方卸売市場	城東青果株式会社	大阪市
	大阪丸五青果地方卸売市場	大阪丸五青果株式会社	大阪市
	木村青果地方卸売市場	株式会社木村青果	大阪市
	堺七道青果地方卸売市場	株式会社堺七道	堺市
	堺市立青果地方卸売市場	堺市	堺市
	大阪南部合同青果地方卸売市場	大阪南部合同青果株式会社	堺市
	岸和田総合食品地方卸売市場	岸和田青果株式会社	岸和田市
	泉地方卸売市場	泉南中央青果株式会社	泉佐野市
水産市場	泉州岸和田水産物地方卸売市場	岸和田市漁業組合	岸和田市
	佐野地方卸売市場	泉佐野漁業協同組合	泉佐野市
花き市場	大阪花き園芸地方卸売市場	株式会社 JF 兵庫県生花	豊中市
	地方卸売市場丸サ天王寺生花	合名会社天王寺生花市場	大阪市
	大阪鶴見花き地方卸売市場	株式会社大阪鶴見フレーザーセンター	大阪市
	大阪泉大津花き地方卸売市場	西日本花き株式会社	泉大津市

## 視 察 の 概 要

### ■ 大阪市東部中央卸売市場

日時 令和2年1月30日(木) 午後2時～4時

会場 市場内会議室 ※座学後、市場内視察

#### 大阪市中央卸売市場の概要

平成31年4月現在、中央卸売市場は全国で64市場(40都市)開設されており、大阪市内では野菜・果実・水産物などを取り扱う①本場及び②東部市場があり、また食肉を取り扱う③南港市場の3市場が開設されている。

#### ①【本場】 開場：昭和6年

《敷地 177,955 m<sup>2</sup>／延床 312,160 m<sup>2</sup> **取扱品目** 青果、水産物、加工食料品》

開場から60年余りを経て、施設の老朽化が著しくなったことから、耐震構造施設への建替えや生鮮食料品等にかかる流通環境の変化と多種多様な消費者ニーズ、情報化の進展への対応が求められていたことから、施設整備に着手し、平成14年に市場棟及び関連棟が完成、平成16年には配送加工棟が完成した。

現在では、コールドチェーンの確保や HACCP 対応の保冷库・加工場が求められていることから、令和3年春の供用開始を目指し、整備中。

#### ②【東部市場】 開場：昭和39年

《敷地 105,615 m<sup>2</sup>／延床 167,945 m<sup>2</sup> **取扱品目** 青果、水産物、加工食料品》

市場間競争に対応できる基盤整備をするため、「効率的な物流の創出」と「食の安全・安心への対応」をコンセプトに整備し、青果卸売場棟の建替え、冷蔵庫棟及び関連棟の建替え、産地トラックの大型化に対応した荷受作業の円滑化、場内の車輛通行の改善、量販店等との取引にかかる荷捌き・出荷作業を円滑に行うためのゾーンを設置し、平成24年に完成。

#### ③【南港市場】 開場：昭和33年

《敷地 100,000 m<sup>2</sup>／延床 31,140 m<sup>2</sup> **取扱品目** 肉類(鳥肉を除く)》

施設の老朽化・狭隘化への対応や更なる衛生水準と機能向上が必要であることから、令和6年度に完成を目指し施設整備事業を進めている。

## 市民を対象とした取り組み

### ◆出張料理教室

市場関係者が小学校に出向き、旬の食材を使った料理教室を開催している。小学生を対象に、生鮮食料品についての知識や調理方法を普及するなど食育の推進を図るとともに、市場の仕組みや役割についての認識を深めてもらうことを目的に開催している。

### ◆市場体験ツアー（市場見学）

小中学校や一般市民を対象に、食材が取引される現場を体感してもらい、市場の役割についての認識を深めてもらうことを目的に開催している。

## 指定管理者制度導入の検討

### ◆これまでの取り組み

- 平成 24 年度に大阪府中央卸売市場が先行して導入（場内事業者が出資設立した会社が運営）。大阪市としては、この事例を参考に導入について検討。
- 大阪市では、平成 24 年 6 月に管理運営業務の効率化を図るため、指定管理者制度の導入する方針を決定。
- 平成 26 年 5 月定例会及び 9 月定例会に、指定管理者制度導入の条例改正案を 2 度上程したが、「日常的に食品を提供する役目の市場において、撤退リスクのある指定管理者制度はなじまない。」との理由から、いずれも否決。
- 民間企業等へ参入のヒアリングを実施したが「業界を調整できる人材が必要」や「運営には市場内事業者の主体的な関与が不可欠」といった意見が多く、参入には否定的。
- 指定管理者制度を導入することによる管理運営費の削減効果の試算（年間 1 億 5 千万円）

### ◆今後の動き

- 市場法の改正（令和 2 年 6 月施行）後、他市場や場内事業者の状況等を踏まえて、指定管理者の導入について検討する。



## 〔仮称〕市場活性化委員会の設置の検討

市場運営協議会において現在、事業者と開設者が連携することで、公正な取引な場としての市場の機能を確保するとともに、市場取引における課題を解決していくことを目的に、〔仮称〕市場活性化委員会の設置を検討している。

構成は、開設者と卸事業者・仲卸事業者であり、市場法改正に伴う第三者販売や直荷引きの方法などについて、今後協議しながら、様々な事項を全員で情報共有していくことを目的としている。

### 【 質 疑 】

問 市内及び市外の他市場との市場間連携について、現状と課題は。

答 開設者である行政としては、詳細を把握していないが、仲卸事業者によっては、他市場との取引をしている事例はあると聞いている。

また、大阪市場に本社を置く卸事業者が、他県の市場に支社がある場合には、いわゆる市場間連携ではないが、荷の連携を図っているケースはある。

問 ネット販売や産直店など流通が多様化する中、どのように対応しているのか。

答 市場の命題は、産地と卸と仲卸が連携をとって、安全な食を提供することであると考えている。市場法改正に伴う直荷引きや第三者販売を活用し対応していきたい。

問 一般市民の集客についての取り組みは。

答 一般市民への小売りについて、市場法で規制されるため基本的には行っていないが、年末に市民への還元という観点から、協力いただける仲卸事業者が実施している。

また、周年事業として5年に一度「市場まつり」を開催し、多くの市民が来場している。

問 市場法の改正により、第三者販売と直荷引きが緩和されるが、現在の状況は。

答 第三者販売について、水産では約4割が仲卸事業者を経由せず直接流通しており、青果はほぼ仲卸事業者を経由して流通している現状である。

直荷引きについては、荷の量が少ない場合、卸事業者を経由せずに直接仲卸事業者へ入っているケースはあるが、詳細は把握していない。

## 【 委員所感 】

### ◆ 飯島 照明 副委員長 ◆

大阪市東部中央卸売市場は、全国に中央卸売市場64市場あるうちでも9番目の売上高を誇る日本有数の卸売市場となっています。そのような日本を代表する市場の視察は大変示唆に富むものとなりました。その中でも特に市場運営については、最近多くの市場が取り入れている指定管理者制度ではなく、市が直営で行っていることや今後の市場法の改正に向けて卸売会社と仲卸会社とで目的や役割分担を明確にし、確認すること、更には輸出に関する要望などは本市でも検討の余地があるとともに積極的な取り組みが期待されると感じました。

まず、大阪市では、市場の運営が直営で行っていることについては、指定管理者制度の導入が難しいとのことでした。その理由は、事業者や業界の調整が難しいことを挙げられました。これについては中央卸売市場ということで関係事業者が多く調整が難しいとのこと、本市においてはそれほど多くの事業者ではないので指定管理者制度については一考の余地があると思います。

また市場法の改正により卸会社の第三者販売や仲卸の直荷引きについては、卸会社と仲卸会社がそれぞれの目的と役割を再度確認するとともに、行政も直荷引きについては使用料を徴収するなどの取り組みが必要と思います。

輸出の取り組みについては、既に取り組んでいる事業者から検疫や通関業務を市場内でできるようにしてほしい旨の要望があるとのことでしたが、本市が整備する市場にはその機能が備わることで市場の機能は大きく向上するとともに、目玉となる取り組みであると感じました。こちらについては確実に実施できるようにしなければいけない取り組みであると感じました。

### ◆ 小高 夕佳 委員 ◆

全国に中央卸売市場は64市場・40都市に開設（平成31年4月現在）されており、大阪市では野菜・果物・水産物などを取り扱う本場と、今回の視察先である東部市場そして食肉を取り扱う南港市場の3市場が開設されています。東部市場は昭和39年に開場したので老朽化のため、平成24年に再整備工事が完了し全体的には新しい印象を受けましたが、市場敷地内に流れている川の上に蓋をして市場内道路として利用するなど立地面での工夫がされていた。また、市場内にリサイクル施設の整備やハトやカラスなどの対策として鷹匠に依頼するなど、環境面でも工夫がされていました。

市場運営に関しては、協議会において事業者と開設者が連携することで、公正な取引場としての市場の機能を確保するとともに、市場取引における課題を解決することを目的に、(仮称)市場活性化委員会の設置を検討中とのことでありました。また、市民に対しては、出張料理教室や市場体験ツアーなども取り組んでおり、様々な取り組みを積極的に展開していると感じられた。

新生成田市場と比較すると市場規模や取扱量は異なりますが、環境面や市民に対する取り組みは非常に参考になると感じました。特に、出張料理教室や市場体験ツアーについては、市民が市場を身近に感じることができるとともに、食の流通の仕組みも学ぶことができ、集客施設棟を整備する成田市場にとって、取り組むべき事項だと感じました。

#### ◆ 眞野 義行 委員 ◆

1964年11月に福島区にある本場から分離した、東部市場を訪問した。敷地面積105.615㎡、延床面積167.945㎡で、延床面積では、甲子園球場の約4倍の広さである。

今回の視察で特に印象に残ったことは、この東部市場は、地域住民に対して開かれた市場を非常に意識していること。例えば、一般市民だけでなく小中学生対象の市場体験ツアーが用意されている。

夏休み子ども市場体験ツアーでは「まぐろの解体実演」、水産仲卸店舗での「仕入れ体験」、青果卸売場では手振り符牒による取引の方法を教わりながらの「せりの見学」、そして、超低温冷蔵庫での「マイナス50度の世界」の体験など、中央卸売市場の仕組みを学べるようになっている。また、イベント会場では「まぐろ丼の試食」「すいかの試食」を楽しみながら、日々大量に入荷する食品の安全チェックを行っている大阪市食品衛生検査所から、検査方法の説明が行われる。これらのイベントを通じて、近隣の小中学生に、市場の役割や中央卸売市場を流通する生鮮食料品が安全、安心であることを教えている。また、イベント会場には、水産仲卸組合が企画した「おさかな絵画コンクール」の入賞絵画が展示されており、市場が子どもたちにとって身近な存在になっていると感じた。

また、大阪市のホームページには「こどもページ」があり、その中に「中央卸売市場」についての学習ページもある。ひらがな中心の「市場関連用語」や、流通を示す、右図のような子ども向けのチャートまで用意されている。

市場にも少子高齢化の波が押し寄せ、仲卸業者の担い手不足が問題になっているようだ。しかし、大阪市場の小中学生に向けた取り組みは、その問題の解決の一助になると思う。

成田新市場は、空港機能強化の一つとして、輸出拠点となるべき施設や流通についての充実が1番であることは間違いない。しかし同時に、地域に根ざす開かれた市場としての存在していくために、こうした大阪市の取り組みは大いに参考になると思う。

#### ◆ 一山 貴志 委員 ◆

1月30日、大阪市東部中央卸売市場を視察し、担当より説明を受けました。東部中央卸売市場では青果・水産物とその加工品や加工食料品を扱う市場である。市場の運営について、大阪府の中央卸売市場が先行して導入した指定管理者運営制度を参考に、現在大阪市の中央卸売市場でも指定管理者制度の検討をおこなっているとのことでした。また、昨今の流通と食に対するニーズの多様化を受けて、「(仮称)市場活性化委員会」の設置を検

討しており、開設者である大阪市と場内事業者などで構成し、市場の運営方針などについて、現場の声を聴きながら決めていく取り組みも始めているとのことでした。

市民向けの取り組みとしては、市内小学校に出前授業や見学ツアーを行っており、子供たちに市場の役割や仕組みを知ってもらう事業等、今後、成田市が進めている新市場にも参考になる取り組みがなされていました。

今回の視察を、今後の委員会活動へ活かしてまいりたいと思います。

#### ◆ 荒木 博 委員 ◆

私どもが視察しました大阪中央卸売市場・東部市場は昭和39年に開設、「食の安全・安心への対応」コンセプト、市場機能の向上と競争力強化を目指して、平成20年～平成24年にかけてリニューアルをし、同時に搬入トラックの大型化に対応した荷受作業の円滑化を図るために場内の車両通行の改善等も実施されていました。

取扱品目は生花・水産・加工食料品で敷地面積は11万㎡、建物延べ面積は17万㎡です。平成30年の年間取扱高は23.1万トン、941億円で、卸売業者は3社、仲卸業者数は90社で取扱金額では全国で11位の規模の公設市場です。また、コールドチェーンの確保やHACCP対応の保冷库・加工場が求められることから、現在整備を進めており令和3年の春に供用開始予定とのことでした。

令和元年11月に「大阪市東部中央卸売市場開設55周年記念市場まつり」を開催や、「大阪東部 いきいき体験ツアー」といった小・中学生を対象に、夏休みを利用した社会体験学習として毎年市場見学を開催していました。この事業は、国内をもとより、世界中から集まる食材の拠点として、市民の「食」と、大阪の食文化を支える大阪中央卸売市場の魅力を知ってもらうため、活気ある取引風景を見学し体感していただくもので、実施内容は、まぐろの解体ショー、水産仲卸店舗見学&仕入れ体験、青果物せり見学、-55度の冷凍庫体験、食の安全・安心のお話、すいか割り・すいかの試食・鉄火丼試食等、普段見学の出来ない場所も見ることができ、せりの体験や美味しい試食、スーパー等で販売されている食べ物が、適切に管理されていることや流通の仕組みも学べるツアー等様々なイベント等を実施しています。

本市では、令和3年開場予定の新市場において、最新の設備と機能を整備し、市民に対して安定的に供給するとともに、成田空港を活用して世界に日本の農水産物等の食文化を提供し、輸出ビジネスの集積拠点として期待するところであります。選ばれる卸売市場になるために、立地条件や強み・弱み等を踏まえて、目指すべき卸売市場の活性化にむけた創意工夫が必要であると考えます。

## ■ 大阪木津地方卸売市場

日時 令和2年1月31日（金）

午前9時30分～11時30分

会場 木津市場 会議室 ※座学後、市場内視察

### 大阪木津卸売市場の概要

施設管理者	大阪木津市場株式会社
沿革	昭和25年 大阪木津市場株式会社設立 — 市場開場 平成15年 グルメ杵屋の子会社となる。 平成22年 食材センター・スーパー銭湯を併設しグランドオープン
面積	敷地 17,500 m <sup>2</sup> / 延床 24,800 m <sup>2</sup>
取扱品目	青果、水産物、加工食料品

民営の卸売市場として、全国有数の取り扱い実績を誇る大阪木津卸売市場は、グルメ杵屋の連結子会社である 大阪木津市場株式会社 が運営する地方卸売市場。

大阪府内にある地方卸売市場（18市場）の中で、唯一水産と青果の双方を取扱品目とする総合市場である。

### 市民を対象とした取り組み

#### ◆朝市の開催

第2土曜日と最終土曜日に「木津の朝市」を開催している。魚介類や精肉などを安値購入できるほか、各店で行われる競りに参加でき、市場体験ができる。

市場協議会が主催して開催しているが、市場を知ってもらう機会として開催している。

#### ◆高速バスの乗り入れ

平成29年に大阪・東京間の高速バスの運行が開始され、多くの観光客が市場を利用するようになった。

また、市場にはスーパー銭湯も併設していることから、朝早く到着した観光客などが朝食を兼ねて市場を利用している。

#### ◆集客施設：スーパー銭湯を併設

平成22年に営業を開始。24時間365日営業していることから、朝と日中は市場に人が集まり、夕方から夜にはスーパー銭湯に人が集まるという仕組みができ、木津市場には常に人の流れができるようになった。また、駐車場の稼働率も上がった。

## 【 質 疑 】

問 市場運営の課題は。

答 課題は、事業者の高齢化に伴う空き店舗である。空き店舗の利用方法としては、仲卸事業者の店舗拡大や倉庫として利用している。今後は冷蔵コインロッカーの設置も検討している。

問 民間市場として、メリットとデメリットをどのように考えているか。

答 メリットとしては、公設市場と比較すると規制が緩いので、バラエティに富んだメニューを提供できるというのがメリットと考えている。  
デメリットとしては、公設市場に比べて集荷力が弱い。

問 ネット販売や産直店など流通が多様化する中、どのように対応しているのか。

答 木津市場を知ってもらうツールとして、平成30年からインターネット販売を開始した。また、周辺ホテルのレストランと連携して、木津市場直送のような看板を設置してもらい、販路の拡大を図っている。

問 輸出に向けた取り組みは。

答 平成30年4月に300坪の食品加工工場を新築し稼働した。HACCPなどの認証の関係もあることからまだ輸出はしていないが、魚を加工して輸出に向けた取り組みを始めたところである。

問 観光客誘致の取り組みは。

答 早朝から開いているのが市場の強みなので、周辺のホテルと連携して、宿泊者に対して木津市場を案内してもらい、宿泊客が朝食を兼ねて観光に来場している。



## 【 委員所感 】

### ◆ 葛生 孝浩 委員 ◆

公設の地方卸売市場である成田市場とは異なり、民間の卸売市場である大阪木津卸売市場を視察しました。現在、成田市場では水産部 25 事業者、青果部 5 事業者、関連事業部 22 事業者、合計 52 事業者ですが、木津市場では水産部 58 事業者、青果部 42 事業者、関連事業部 44 事業者、合計 145 事業者と規模が異なります。ただ木津市場は民間市場のため各仲卸業者の売り上げの把握はしていないそうです。また卸売業者は水産部が大阪木津市場、青果部が南大果となっていますが、公設市場に比べて集荷力が弱く、仕入価格が上がりやすく、仲卸業者との取引も「競り」では価格が下がってしまうため「相対」による販売が主になっているとのことでした。また、近年は加工食品への需要が高いため、売れ残った商品を加工して販売するための取り組みとして魚を使った加工品の販売を考えているそうですが HACCP 認証に時間を要しているようです。なお、加工品に限らず、木津市場の商品と分かるように小売店にはポップを無料で配布しており、見習うべきだと感じました。

事業者においては、後継者がおらず高齢化により空き店舗が増加してきており、廃業率は年間 10% にもなるそうです。空き区画は事業者の荷置き場や利用客の休憩所として、また自動販売機や冷蔵機能付コインロッカーを設置して利便性を上げるために活用しているようですが本質的な課題の解決にはなっていません。新規参入のサポートをすることで事業者を呼び込む取り組みや市場としての魅力を高めていく取り組みが必要であるため、市場組合では朝市を実施しており、毎回千人程度の実績がありますが協力店は事業者の 5 割程度にとどまるそうです。また、市場見学ツアーや民間バス会社の夜行バスのバス停が設置されるなど、市場の魅力向上に役立っていると感じました。そのほかにも、駐車場の稼働率を上げるために始めた温浴施設が、現在では 1 か月あたり 2 万人程度の利用者がいるそうです。木津卸売市場のすぐ横を通る阪神高速道路の高架下に設置されている「木津まち横丁～○（えん）～」には成田の新市場で計画している集客施設棟に近い機能があり、飲食店が 17 店舗ほど軒を連ねています。営業時間はそれぞれですが、多くは市場の開設時間ではなく夕方からオープンするそうです。

観光資源として活用する上では、温浴施設もそうですが、繁忙時間帯がずれることで駐車場の利用の分散化が実現でき効率の向上が見込めます。また早朝から夜間まで営業していることは観光資源として重要な意義があります。

全国的に卸売市場の取扱高が減少していく中で売り上げを伸ばしていくには特徴をもって運営していくことが必要とされます。公設であってもそうでなくても、そこに入る卸や仲卸業者は民間であることを実感しましたので、しっかり事業者の意見にも耳を傾け、協力して新市場の発展のために取り組んでまいります。

### ◆ 大和 義己 委員 ◆

大阪木津卸売市場（以下、木津市場）は、300年を超える歴史を誇り “食い倒れのま

ち” 大阪の台所として、大阪市民の生活を支えてきました。そのルーツは平安時代にまで遡り、朝廷のお抱え商人・供御人（みくりやくにん）として主に魚介類を奉納していたとも伝えられています。

現在でもその名残を目にすることができ、大阪を代表する戎（えびす）祭では、木津市場から古式に合わせて由緒ある鯛（戎鯛）が奉納されています。そんな木津市場の原型は、今から約300年前、1710年頃（宝永年間）に、各人がそれぞれの商品を持ち寄った野立ち売りにあります。戦災の影響で一時期廃場ともなりましたが、昭和25年、旧市場関係者有志により完全民営の卸売市場として再開場を果たし、昭和48年には、大阪木津地方卸売市場と改称し、日本最大級の規模を誇る民間の地方卸売市場として現在に至ります。また平成19年からは、市場のリニューアルにも着手し、平成22年にグランドオープンしています。

現在の木津市場は、早朝から一般客の方の買い物OK、鮮度が自慢の新鮮素材、温浴施設、楽しくお得に名物朝市(毎月2回開催)を目玉にしています。朝日放送テレビ「おはよう朝日土曜日です」の年末SP企画内にて、木津市場を生中継にて紹介するなど、民間の市場らしくPR活動にも積極的です。

平成30年からインターネット販売に取り組み、近隣のホテルなどと提携し、食材の提供により、食材のPRにも取り組んでいます。

中央卸売市場のような取り組みはできないものの知名度を高める取り組みして、集客力が高まってきていると感じました。また、大阪木津卸売市場から和歌山県や東京経由千葉行きの直行バスの運営など、交通網の充実も図っています。

しかし、市場運営上、高齢化が進み廃業する仲卸の店舗もあるため、空き店舗が多くなってきているとのことでした。新規参入するお店も少ないことから、今後の取り組みを模索しているとのことでした。

昨年4月から操業している加工工場を敷地内に増設して、生協や輸出にも取り組むことにより、活性化を図っているところです。

坪2万円ほどの賃料なので利益が十分に上がらない店舗が多い中、十分な利益を上げている仲卸店舗もあるといいますが、昔ながらの気質から、同じような取り組みをしない業者もあるといいます。

これから新生成田市場の開設に向けて、民間を参考にして、活気ある市場になるように取り組んでいかななくてはならないと感じました。

#### ◆ 星野 慎太郎 委員 ◆

木津卸売市場は、民営の卸売市場として全国有数の取り扱い実績を誇る地方卸売市場です。中央市場とは異なり、市民を対象とした取り組みにも力を入れており、「木津の朝市」では魚介類・精肉を安値で購入できることから利用者に人気となっており、毎回2,000人の一般客が来場しています。また、市場内は利用者が買い物をしやすいようコンパクトな区画となっており、業務用スーパー、飲食街そして2階の温浴施設は集客の大きな目玉であり、2

4時間人が訪れることができる施設となっていることは素晴らしい。

厳しい経済状況への対策と空間利用として、市場裏手のガード下に飲食店舗を揃え、昼はオフィスビルから会社員などがランチを食べに、また夜には酒飲み何処として、人が集まる場所となっています。

このように民営市場としてさまざまな工夫があり、全国有数の実績に納得できました。管理棟・集客施設の重要性を痛感し、本市新市場においても学ぶべき点が多く気づきを頂きました。

#### ◆ 会津 素子 委員 ◆

木津卸売市場のホームページを見ると、大正から昭和にかけて政府の方針に従って多くの市場が閉鎖される中、木津市場は抵抗し市場を守り抜いたという歴史が誇らしく書かれている。そのような意味では、現在全国に広がっている「市場の民営化」とは全く性格が異なる施設である。木津市場は民による民のための市場であることを踏まえて所感を書きたい。

木津市場は大阪市の中央に位置し、徒歩圏内に3駅、近隣には大企業やホテルが立ち並び立地条件としては非常に恵まれている。私たちが場内を視察した際も多くの人々で賑わっていた。しかし、そのような木津市場にも少子高齢化の波が押し寄せている。高品質の食材を扱っていることで有名ではあるが、高級料亭の数が減少していることも木津市場を悩ませている。仲卸の意向により大々的に一般客を呼び込みにくいという事情もあるようだ。

このような状況ではあるが、新しい時代に合わせた工夫も行われている。例えば、朝市や「なにわ食い倒れマーケット」「献鯛式」などのイベントには多くの客が訪れるとのこと。また、加工品や個別に配送するサービスは需要が伸びている。客の1割を占める外国人に対応した店も売れ行きが良いとのことである。市場周辺のホテルや民泊に宿泊する観光客にとっても、早朝から開いている市場は喜ばれるようだ。25時間365日開いている温浴施設には一日1,000人が利用する。木津市場の食材を使っている近隣のホテルや飲食店には「木津市場直送」の提灯を掲げていただき、市場との連携をアピールしている。市場前からは池袋や船橋に向かう高速バスも走るようになった。このように、民間ならではの発想力を生かした様々な取り組みが行われている。300年の歴史を背負い、失敗が許されない民の市場として、必死の努力を感じる。

しかし、先に述べたようにこのような木津市場においても、少子高齢化に逆らうことは困難を極めており、空き店舗が生じている。そして言うまでもなく、少子高齢化は日本全体の課題なのである。新生成田市場の立地は空港に近いという好条件をもつ一方で、市街地からの買い物には不便を強いられてしまう。成田市においては、今後の人口動態についてしっかり分析し、これからの時代に合った市場をつくることが求められる。成田市場は木津市場とは立場が異なり、そこには税金が投入される。今の流通形態が市場を先細りさせているのであれば、逆に民間の市場やスーパーマーケットにはできないことに取り組むことが必要ではないだろうか。例えば、「市民の食環境や健康を守る」という立場から、有機野菜や非遺伝子組換え食品や非ゲノム編集食品などを並べる、日本の伝統食の料理教室を開催するなどが挙

げられる。

今回の視察を通して、改めて総事業費 137 億円の新生成田市場の移転・再整備に対して不安が募る一方、市場の新たな方向性についても考えることができた。関係者の皆さまには心から御礼を申し上げたい。

#### ◆ 小山 昭 委員 ◆

1714年（正徳4年）地売りから始まり、1810年（文化7年）大阪代官篠山十兵衛景義の斡旋により官許される。300年を超える市場史を誇る。食い倒れ大阪の地で「なにわの台所」として飲食店や小売店を支えてきた。そのルーツは平安時代に遡り、朝廷のお抱え商人（供御人）として主に魚介類を貢献していたとも伝えられている。大阪を代表する戎祭では、いまでも木津卸売市場から由緒ある古式に合わせて鯛（戎鯛）が奉納されている。

集荷力は、長年の信頼関係に基づく産地とのネットワークによる安定した集荷力により、民間運営ながら地方都市の中央卸売市場並みの取扱高を誇るという。

品質は、高級料亭や割烹店等の引き合いが多い上物水産物を扱う卸売市場として知られており、食に係る買い出し人が仕入れにくくことも大きな特色である。高品質の取り扱いに自信を持っている。取り扱い品目は、漁師が直接持ち込む小物類（雑魚を含む様々な鮮魚）が特色で、他に大阪地場野菜も豊富である。

新生成田市場は、本格的な運用はこれからであるが、高集荷力・高品質・高集客力を養い、世界に誇る新市場となることを強く希望し、しっかりと取り組んでいきたいと考えます。

#### ◆ 油田 清 委員 ◆

大阪には大阪府や大阪市の開設として総合市場・中央卸市場が3市場あります。これに加えて唯一の民間の総合市場・地方卸売市場が大阪木津地方卸売市場となっています。公的よりも規制が緩やかなので、様々な挑戦を試みているようですが、全国の市場と同じように苦戦しているように感じました。

苦戦しているのは全国共通で流通システムが、大きく変わっているからです。この木津でも大手スーパーなどが生産者から直接買い付け、市場を経由せずに流通されていることにあります。また消費者の人口減少や加工品への嗜好の高まりなどがあります。他方では卸・仲卸の「時代遅れ」的な問題も指摘されていました。これからどこもインバウンドを視野に入れなければならないようになっていますが、「外国人お断り」の意識が強く、昔ながらに値札をつけることを嫌がることもあるようです。視察の時にも中国からのお客が結構いて、一箱5000円もするようなイチゴが売れていました。市場活性化として、一般のお客を対象とした朝市（月1回、2000人ほどが参加）の開催をしていますが、仲卸の50%程度しか協力しないといわれていました。その仲卸も高齢化による廃業も増えています。そのため空き店舗対策も重要になっているようですが、構造上難しく、自販機・休憩所の設置、お客のための写真スポットづくりなどされていました。さらには自分の代で終わるという意識があり、そ

の意識が活性化を妨げているように感じました。

活性化で大きなものは「湯源郷 太平のゆ」です。朝は主に市場の時間ですが、閑散とする昼・夜の時間帯を活かした温浴施設で、宴会もできる178席あるレストランも併用しています。平日は700人、休日は1000人ほどが利用しているということでした。市場横には大阪―東京間の高速バス停留所も作られ、早朝に食事をし、湯でくつろぐことも考えているようでした。また業務用スーパーも併設し1日に1,000人程度が来ているということでした。こうした複合施設としての運営は民間ならではの工夫だと感じました。賃貸としての不動産収入も大きなものがありました。このほかにも、グルメ番組など各種メディアへの働きかけもありました。今後は、加工工場の拡大や海外販路の拡大など進めていくようでした。

成田新市場も同じように、加工部門の拡大と海外への販路拡大が重要テーマになっています。また集客施設の集客棟も魅力あるものにしていかなければなりません。民間ほど小回りが利かない新市場ですが、生産者・卸・仲卸・行政・消費者が一体となって取り組んでいく必要性を改めて感じさせる視察でした。

## 【 委員長所感 】

1月30、31日の両日の日程で、大阪市の東部中央卸売市場と大阪木津地方卸売市場の2市場の視察を行った。

大阪中央卸売市場は昭和6年開場のたいへん古くからの歴史ある卸売市場で、その後、取扱量も増え、手狭になったため、昭和39年に市内東住吉区に東部市場として、本店支店のよう形で青果、水産物、加工食品を扱う総合卸売市場として開場した。取扱金額は、本場が中央卸売市場全国3位、東部市場が全国11位と全国有数の市場として名をはせている。施設は平成20年代にリニューアルをしたとの事だが、あまり新しさは感じられなかった。東部市場の中心的企業の東果大阪株式会社は成田市場青果の大株主である神明ホールディングスとの事で、アジア各国への輸出にも力を入れているとのことだった。

2日目は同じ大阪市の大阪木津卸売市場を視察した。この市場の歴史はさらに古く、そのルーツはなんと平安時代に溯ることができるとのことであり、市場としての機能は300年を超えるとの事でした。立地は大変良く大阪のど真ん中に位置しており、外国人観光客も多く訪れるようである。民営の卸売市場として、全国有数の取り扱い額を誇っている。当市場は業務用スーパーや温浴施設、飲食店からなる複合施設であり、24時間人が訪れる施設となっている。すぐ脇を走る阪神高速道路の高架下にも一般客が利用できる飲食店街ができています。その隣には高速バスの「なんば大阪木津市場」停留所もあり、夜行バスで着いたお客さんも温浴施設や飲食店があるのでゆっくり休んでいく人が多いそうである。

場内は通路幅を広く(3m)とっており、安全性が確保されており、買い物客もゆっくりと見ながら歩ける。近くにホテルや大きな事業所があるので、安定した売り上げの確保ができるようである。

市場という競争のイメージが強いのだが、どちらの市場も競争場のスペースはあまり広くなかった。このことから競争の重要性が低くなっているのを感じた。また、どちらも一般客の誘客のためにチラシを入れて朝市を行っており、観光客の誘客にも工夫をこらしており、常に営業努力は怠らない姿勢が伺われ、卸売りに限らず、小売りへの取り組みの重要性はどこも同じだと感じた。

両市場とも立地は、天下の台所の異名もある大都市であり、訪れる外国人観光客もたいへん多く恵まれている。その点が高い取り扱い量を維持していただける一番の要因であろう。その後、予定になかった黒門市場も視察することができ、二日間の視察をたいへん有意義に終えることができた。

終わりに、委員各位にはたいへんご協力を頂きましたこと厚く御礼申し上げます。

新市場整備・輸出拠点化等調査特別委員会  
委員長 石渡 孝春